



仇諧七部集

阿羅野

六

中村俊定文庫

文庫 18

685

6



木瓜

荒野集卷之六

雜

年中行夏内十二句

供屠藕白散

荷今

いそげなやとそあまのり人比身

春日祭

やーるんるんあのをあはははは

石清水臨時祭



水青木とくつゝかきつゝのり

灌佛

三好女日やういへんは女佛蓮

端午

おもひつゝ夢付ゝは髪とほ

施采

うらめゝおとほ采え虫臭と

乞巧費

ワの榮とくゝ七夕草とくゝ

駒迎

瓜敷友も旅のすゝめをいほむと

撰虫

さよの我めや豆のおおとちか

十月更衣

玉しとくお衣とくゝやうるを

五公篇

舞姫に來りし指を折るなり

遊難

木を折るや腸よりつらき思は面

詩題十六句

野水

今日不知誰計會

春風春水一時來

水ぬし流る流るはまきの風

白片落梅浮胸水

あるをたしに付は梅白し

春來無伴閑遊少

花賣よりあつたのあつ隣り

花下忘帰因美景

突入なばもの川をせむ河の下

留春春不留春歸人

寂寞

いまもこゝろへはの野もれ

巖風吹袂衣

不寒復不熱

徐脫色松葉掃宇くけりて路

池晚蓮芳謝

蓮のまをいりあきるるまをこけ

暑月身家何処有客

來唯贈北窓風

涼をとりて切ぬるまかり水のまを

大座四時心惣苦就中断腸是秋天

空の藤そゆりてあけ 秋の空

夜來風雨後秋気飒然新

秋のぬきゆりて風をぬきはは

遠々鐘漏初夜長

秋々星河欲曙天

残照燈帛猶斜光月穴穿牖

残照燈帛猶斜光月穴穿牖

霜りも夜や流るる白くよまの月

万物秋霜能懐色

白くもやまの秋の心を秋の暮

十月江南天气好

可憐冬景似春美

こがししよまの息つく少き夜

寂寞深村夜残る雪中閑

静かよまの心よこぬむやまのうま

白頭夜礼佛名経

佛名の礼之腰懐く白髪は

静かなる懐ひのうらなはしむ

こがししよまの心よこぬむやまのうま

鋸鐮目立

舟泉

かき紙のり月やらむさつあつ

付木突

五月園の鶉をよめる人の歌

鉤瓶縄打

かへるはちやほの〜と宿秋の里

糊賣

あ〜のき〜れ〜び〜

馬糞搔

こが〜しの松〜を〜

李夫人

越人

槐在何許香煙引到焚處

かけぬきの抱は〜

楊貴妃

雲鬢半偏新睡覺花

冠不整下堂

さ〜の風〜

昭陽人

小頭鞋履窄衣裳青黛

默眉々細長外人不見々應笑

ものあやかし のまのけい  
あしん

西施

官中拾得娥眉芥不獻吾

君是愛君

よなるの 袖の 牡丹の影

王照君

王貌風沙滕畫圖

このまよひの柳の

一目留主をくさるる侍

卯

釣雪

疾也の故也は佛供焼火く

辰

杜若生ん繪書紙来るは

己



釋乃眠

午

乃而ひと

未

蟬乃喜之武家終夕食

申

五月雨也

# 秋

西之あ

是形

山秋

麻苗乃上

樹水

野鳥

野実

見竹

星虫

枝あり

合帖

# 蜀漆

海魚

おめしるを鰯引きと盆の月 全

川魚

秋の昏物川くの火ぬきと 合帖

牛馬置是謂天落馬首穿牛

鼻是謂人

一方を柄はく柄は継木と部 越人

# 壑

藏舟於壑藏凶於澤謂之  
周然而夜半有々刀者負  
之而走

かゝるゝ所走の市にらるゝこい

絶聖棄衆知大盜乃止

セクシキヲシテトシトナシトシ

鏡者久

# 鏡

其ぬらゝく流るゝものちを中か 桂夕



曠野集卷之七

名所

つぎつぎすみ奥をこ見ふ名所 杜園

—— 奥に骨や或る大江山 荷今

かゝ橋乃松を地を腕まゝ 芭蕉

昔第一把うらゝく切えり何波も水 湍水

嵯峨はくくちるるあけぬ心盛 荷今

琵琶橋眺望

中を残る鬼獄さむよゆまのま 合昭

実ちまゝくまをこゝろ 宗祇 法師

美濃國岡崎の西の心

おのゝみゝゝゝゝゝゝゝ

身歸あゝく布子着たれ更衣 杜因

夏うつやゆゆのあゝい志願の 重五

五月雨くかぢあぢのあぢあぢ橋 芭蕉

湖乃のゆきゆきあぢあぢ 去來

牛もほしも羽のあゝりけり月雨 一髪

角回川

いこのほつたあぢあぢのあぢあぢ 貞室

みづのさゝいゝあぢあぢのあぢあぢ 破笠

いゝいゝいとほゝいとほゝのあぢあぢ 芭蕉

夕月也杖くあぢあぢのあぢあぢ 越人

九月十三日

角くまゝく富士あゝゝゝのあぢあぢ 素堂



揚嘆星を眼くく通るなり 夕楓

日の入や舟こえく行樵の也 一髪

のさくー也漾の蘆花はさうな 荷兮

出川脱く後之たひぬ衣こく 芭蕉

ある人の後別二

ちよ〜〜〜次あ〜〜〜た〜〜〜く笑なり 除凡

疾く〜ぬく食糧有やうゆ也たん 冬松

数と〜うす〜らに物ゆる藤花水 昌碧

五月雨也桂月を初す市結家 松芳

夕と以上の大名う一志はあや 傘下

芭蕉ちよ〜〜〜

稲妻あに〜〜〜つきあ〜〜〜なり 釣雪

なと〜〜〜枝こす秋の蟬 一井

あそ風〜〜〜つらぬ水 野水

お〜〜〜〜〜〜〜のうあさ〜 舟泉

さか〜〜〜〜〜〜松〜〜〜ぬこ 嵐弾

ちりしなまのくもむらさき

又級乃月さこ二人ささる秋のり 荷今

越人龍ささるがしやてあまのり

月にし腸えつさき馬乃さ入 野水

たさ河川たさりつさる本曾た 芭蕉

階乃鼻たは是た教り秋のり今 路通

将乃桶らあお其角たさあさる

たさあさる

将乃桶に麻をかつき秋の山 荷今

さあさる 稲さるあまのり ちり

入月ささるさあさるしさあさる 去寮

能さあさるあまのりあさる那 一升

田川ささる人さあさるあまのり

澤菴乃墓さるり秋のり 文麟

草枕たさあさるあまのり 芭蕉

族あさるあまのりあまのり 常秀

津島





も野のそと

○女あまたさあけり奥の院 杜園

梅さくらあけりも食は 梅吉

高野のそと

○父あの子あけり色 雛子の色 芭蕉

あけりさあけり色あけり色 荷号

あけり入湯あけり色あけり色 同

一本のさすしあけり色あけり色 杏雨

肩衣さあけり色あけり色あけり色 秋風

あけり色あけり色あけり色あけり色 亀洞

九月十日あけり色あけり色あけり色

あけり色あけり色あけり色あけり色 嵐雪

あけり色あけり色あけり色あけり色 暁語

人のさあけり色あけり色あけり色

○あけり色あけり色あけり色あけり色 芭蕉

四里の人さあけり色あけり色あけり色



まぬくや余のこころも時ち

除風

蚊をかくる夏のちかきこころの那

長虹

むしは乃月くまれぬこころ

文淵

虫に小神をこころの女う那

冬文

さくひめ 蝶の垣のこころの

心棘

六官粉黛無顔色

平月周の稲妻の雨のや月の那

長虹

一色くこころの人のあかさをうり那

尚白

まひらふか

しきりこころのあかきやうゆ

荷今

まろこころのこころのまろこころ

小春

妻の氣があらうこころのこころ

越人

松の半時争う旅のこころ

俊似

おおもひ火燈を照くこころ

舟泉

うさねさかき燈のこころ

嵐集

山畑のこころのこころ

松芳

心あはれしむらさき教へんむらさきしむらさき 冬松

ねえらうーやいぬーの虫御歌とて 昌碧

無常

末期く

あまふもふもふとあまふもふもふ 守武

世帯一巡連

咲つたあつたあつたあつたあつた 井島水傘下

末期く

菊世や空まきとあつた乃ほしき 兎順 <sup>唄</sup>

松奴のほろから人のあまきり

うーうーうーうーうー

橘乃うほつとあつたあつたあつた 荷今

うーうーうーうーうー

あつたあつたあつたあつたあつた <sup>京</sup> 去来

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた 荷今



桂の風子や留り合ふ秋の香 尚白

ある人の遠きへ

埋火をさよやあみこの意をも 芭蕉

旅よてみまうりまふ人

あは空をみそくちうら子河なり 嵐弾

多由野へさやと俳の多紙 加加見 小春

曠野集卷之八

釋教

伊勢へ

神垣やねあはらうにほげ像 芭蕉  
負と暮るおねは ちりねん 嵐弾

西行上人五百歳云々

たけのこやしめぬ梅の風 荷兮

たけのこやしめぬ

蓮翹也そ移と目せし志ほ我りり 胡及

うく青く降の雨くくは二玉か 松芳

木履くく信もきり雨乃花 在因

片こいひとてぬく勢く花のき 冬松

花の酒信も俺ん揚さこの歌 其角

通

貞享つらむ辰の歳孫主月東照宮の別當  
僧正の法房に慈意大師近座執事法奉  
八講の信はしきまのるを徳自又まうく  
序品のころんか

散花のつらむいしきり 越人

女房の徳字とてまのり兼平法松信とて

あま龍女成佛のあまひりてまのひあま  
白果かむきり

ほろくくとあまあまの 同

親着姑尾よのころくくはまり 俊似

古寺やほるとめりの莖草 一井

八雲のころし

海をみあめあまのいこむやみ 千園

暖よきりあまらんあま紅牡丹 一井

復心や本陰くの江湖影を 莖葉

仔藤



あめつちのまへ

○薩佛乃りゆへにやまのふもろのふか 芭蕉

薩佛のそと清——きりかき—— 尚白

さるけいこ

腰のあひこりれ美をちかひ山山 一雪

糸と来ては蒼つ日の清あふか 加賀 一笑

十如是

おあひこりあつたつて通る—— 荷兮

昂身昂佛

復隈乃りきく疾とちんの佛小 愚益

ほろろひや後の縁おちる夜 崩彈

おろろろやのりくあつて施餓鬼棚 荷兮

おろろろおちばとるひのめさし 探丸

石籠と忍辱鬼の棚のくつきや 文里

魂糸舟とる酒をも白きり 亀洞

たまあつとるあつとるあつとる 卜枝

桜待みよ〜らんこらん松乃陰 釣雪

平ホ施一切

桜待みよ〜らん人な〜んを〜り 俊似

綿妻〜り大佛おるの神中亦 荷兮

恒越〜り遠守取〜りや〜り 卜枝

あつ人四時の景柳なりとて水鏡と

燕とと不食不園を〜んを感〜り

子あとも〜り〜り〜り

厚く〜ぬら〜り〜り〜りハぬろ 荷兮

あつちの身は〜り〜

燕の法寺乃 敷〜り〜り〜り 其角

進〜り〜り〜り〜り〜り 一井

新の子〜り本錦〜り〜り〜り 卜枝

人のかたはあつち〜り〜りおむ〜り〜り

衣〜り〜り〜り〜り〜り 嵐弾

鎌倉の西園倫寺〜り〜り

た〜り〜りの流や直〜り〜り〜り 越人

古寺のつら

〇 暎や伽藍の雪見也ひ 荷今

同

〇 雪ややうと二王より片腕 俊似

〇 つらつらとくこいされもき 雪仏 一井

〇 新雪する人のこいさや神鼓 文陶

〇 千觀り馬とかせりし 子のつれ 其角

薬王品七句

如寒者得火

おの白くむきの後とつこいさ 胡及

如裸者得衣

雪乃日ゆほ楊指ふあまけ家

如商人得主

双六乃あひこよひとむしつら

如子得母

竹もくしをけとんつとさけの肌

如後得船

月影比隣の板木さかきなり

如病得醫

かきくさかきははあそくはあじまの

如暗得燈

秋のよもぢおしゆもあはれに記さ

神紙

古きや名まらうの獅子頭 釣雪

二月廿五日を御く

おさうとまや廿四日の月影梅 荷今

まんと梅まぬうの庭火分 同

さうとあめひてこし神の梅 亀洞

上下のさうとぬやうと神の梅 昌碧

灯のかすのなかり梅の中 釣雪

何れもわづらひのやそとまきし梅のむ 越人  
 笑くわくあふあそとまきし梅のむ 舟泉  
 月代もまきしや梅のむ 雨桐  
 門あつて梅も瑞籬たふり 重五  
 繪馬も西人の及まきとまきし 玄察  
 若くまきし齒牙かきとまきし 鈍可  
 宮乃後川後もまきとまきし 李桃  
 此も彼の本もまきし中の中の 好葉

虎

ほろもきし虎の中をまきし 玄察  
 まきし虎をまきし 亀洞  
 破扇つまきし 未学  
 川系も虎もまきし 荷今  
 こかりしや星も子も 尚白  
 此も月もまきし 松芳  
 まきし虎も 落格

若宮奉納

こころをいかにも妙也神々系 利重  
跡の方也と候もやらずの跡系 野水  
新麻川若明の跡より神系系 昌碧  
かつこの神とてふとて庭火が 村俊  
橋杭や内稜くる媒とていひ 卜枝

祝

肩付らういふくくちなり也を系之 冬文

荷字々四十乃まきく

炎毒も竹を修とていふなり 重五  
君の代也とていふとて玉つとて 越人  
青苔も何れもとて神の石 傘下  
いふとて満ちたりとて杖のん 亀洞  
ふいふの秋にありとていふとて 同

きくかき神ありとていふとて

光程へ梅の木のあつとていふとて 芭蕉

